創 刊 号
（2001年3月20日発行）

出版白門

出版界に新風を送り込もう！

CONTENTS

▽設立総会
▽第２回総会案内
▽創刊によせて
▽新年会リポート
▽新年会　特別講演
▽経過報告
▽会員名簿
▽理事紹介
▽私も一言
▽役員紹介
▽新規会員募集　他

第２回「出版白門会」総会を７月６日（金曜日）に開催いたします。さて今総会では、出版白門会としての継続事業についてひろく意見を交換し、会にふさわしい懇親会・情報交換会などの企画を立てたいと存じます。皆様のご意見を募ります。

会場　中央大学駿河台記念館
　　18時より

万障お繰り合わせのうえ、ご出席賜りますようお願い申し上げます。

2000年10月21日　駿河台記念館で
出版白門会 設立総会を開催

出版白門会は卒業年次・学部を問わず、中央大学で青春をすごし、今、出版社・取次・書店に代表されるいわゆる出版業界で働いている人たちが集い、さまざまな情報交換を通じ、新たな人の輪を作り、出版界に新風を送り込むべく企画されたものです。中大は出版業界で活躍される同門の士をあまた輩出しながら、白門に集う有志の会がこれまで存在しなかったことは不思議なことでした。

立ち上げにいたるまで、さまざまな試行錯誤がありましたが、77名の方々のご賛同をいただき、平成12年10月21日、設立に漕ぎ着けました。

設立総会では準備委員会会長の小竹正倫氏の挨拶の後、上瀧博正氏が議長に選出され、出版白門会規約案、役員選出、事業計画及び予算が承認されました。

引き続き、懇親会が開かれました。上瀧会長の挨拶、小関道賢副会長の乾杯のご発声で厳かにかつ和やかに記念パーティーの宴がはじまり、来賓の鈴木康司学長・辰川弘敬常任理事・大西保学員会会長の方々の出版に対する熱い思いのご祝辞をいただき、終了時間が過ぎても歓談する会員諸氏の姿が見られ、盛会の内に閉会しました。

「出版白門」創刊に寄せて

出版白門会
会長
上瀧　博正

会員皆様にはますますご清栄のことと喜び申しあげます。

さて、昨年10月にスタートした当会でありますが、お陰様で新年初の会合も北方謙三氏を迎えて盛況裡に過ぎ、今般、当会規約に基づき、会報発行の運びとなりました。

近年のＩＴ技術の進歩により、リアルタイムの情報交換が急速に拡大しておりますが、コミュニケーションの本質が人と人との結びつきにあることは変わらず、むしろ多事多難な今日であるからこそ、私は手作りの交流の輪を広げてゆくことが一層大切だと思っております。

白門と出版、二重の絆で結ばれた当会でありますが、このたびの会報発行を機に、更にお互いの友交を深め、設立の趣旨にかなう運営に努めてまいりたいと考えております。

会員皆様にはどうか今後ともご協力のほどよろしくお願い申しあげます。

（こうたき　ひろただ・トーハン）

中央大学学長
鈴木　康司

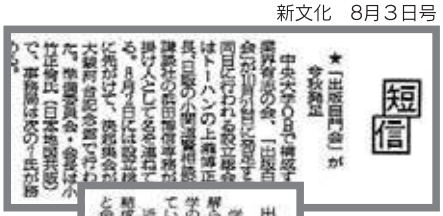
昨年秋、中央大学学員会の一支部として、新たに出版白門会が発足しましたことは、まことにご同慶の至りでありました。そして、このたび、その会報である「出版白門」が創刊の運びとなりましたのを心からお喜び申し上げます。

設立パーティーの席上でも申し上げましたように、私も出版屋の息子であります。私的なことで恐縮でありますが、父、鈴木一平は１６歳の折、故郷、木更津を出て当時神田にあった修学堂という本屋に奉公いたしました。明治３６年のことです。そして、３０歳のときに独立し、大修館書店を設立、生涯を出版人として過ごしました。諸橋轍次博士の『大漢和辞典』発行が、父の最大の業績であります。私も幼いときから、そんな父を見て育ってまいりましただけに、出版白門会の創立には心からの感動を覚えたわけであります。

出版白門会の皆様が上瀧博正会長のもとに結束され、そのシンボルとして会報を作られると伺い、快哉を叫ぶ思いでおります。この会報を通じて皆様の連携がますます強まり、出版白門会の更なる発展に結びつくことを確信しております。創刊、おめでとうございました。

（すずき　こうじ）

新文化　8月３日号

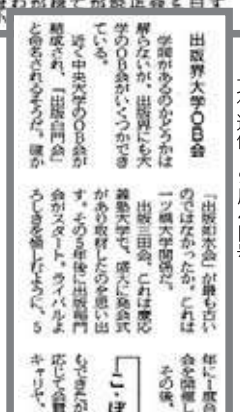


短信

★「出版白門会」が今秋発足

中央大学OBで構成する出版界の会、「出版白門会」が10月9日に発足する。同日に行われる設立総会はトーハンの上瀧博正会長、日販の小関道賢相談役、講談社の武田雅彦常務が挨拶人として名を連ねている。8月1日には設立準備発起人会が開かれ、横浜集会が大駿河台記念館で行われた。発起人代表・小竹正俊氏（日本地図共販）で、事務局は次の7氏が務める。

文化通信　9月4日号



出版界大学OB会

学閥があるのかどうかは解らないが、出版界にも大学のOB会がいくつかできている。

近く中央大学のOB会が結成され、「出版白門会」と命名されるそうだ。確かに「出版知次会」が最も古いのではなかったか。これは一ツ橋大学閥だ。

出版三田会、これは慶応義塾大学で、歴史ある会式があり取材したのを思い出す。その5年後に出版青門会がスタート。ライバルよろしくを標榜するように、5年に1度合同で会を開催している。

その後、出版

出版白門会、発足

会長に上瀧トーハン会長

出版界に在籍する中央大学OBで組織する「出版白門会」が会員180人で発足、会長にはトーハン・上瀧博正会長が選出された。

設立総会は10月9日に東京・神田駿河台の中央大学駿河台記念館で開催、総会決議事項を賛成多数の可決、承認した。

中央OBは

に上げていく

が自立つ。上瀧

道賢相談役の乾杯、鈴木康司学長はじめ大学関係者の祝辞があった。なお、鈴木学長は大修館書店・鈴木荘夫社長の実弟、「わたしもお学閥に」と長講を続けた。

▼会長＝上瀧博正・トーハン▼副会長＝小関道賢・日販、武田雅彦・講談社、小竹正俊・地図共販▼理事＝朝妻伸雄・集英社、鳴下千秋・図書館流通センター、肥田俊昭

文化通信　10月30日号

出版白門会新年会リポート

1月19日（金）午後６時より中央大学駿河台記念館で、80名の出席者の下、21世紀最初の行事である、「出版白門会新年会」が挙行された。

第一部は、我が白門ＯＢである作家の北方謙三氏をお招きして、新春特別講演会を開催した。学生時代の思い出から、外国での貴重な体験、本の重要性、最新作『水滸伝』まで、予定の時間をオーバーする程、熱くエネルギッシュに語っていただいた。

７時からは場所を１Ｆのレストランに移し、上瀧会長の開会挨拶、小関副会長の乾杯で懇親会がスタートした。

予想以上（？）の出席者で会場内は熱気に溢れ、其処此処に談笑と交流の輪が広がった。新春スペシャルイベントとして行われたクイズでは正解者に豪華賞品が贈られた。

時間の経過とともに、酒量も上がり、

一家言をもつ論客揃いであるが故、21世紀の出版界への提言・放言・愚痴？　も飛び出すに至り、名残を惜しみつつも小竹副会長の中締めで散会となった。

（実行委員会　記）

人間が「人間」であるために

北方　謙三

北方でございます。

何年に卒業したかよく覚えておりませんで、ただこの界隈をウロウロしておりまして、たぶん６年くらいで卒業したと思うんです。卒業証書はもらったような気がしますので。私が中央大学にいた頃というのは、まだ駿河台に校舎がありました。忘れもしないあの２号館という凄い建物がありましてね。そこの４階の木造部分の所に真法会とかの司法試験受験団体の蛸部屋みたいなところがありましてね。そこの奴等は皆何と言いますか、眉毛を片方だけ剃っているとかね。なぜ眉毛を剃ってるのかと聞きますと、これだと恥ずかしくて外へ出られない。だから剃っているんだ、というんです。

でも、２号館というのは、なかなか味のある、何かこう、都会のド真ん中にあって、外へ出るとすぐ道で裏側がニコライ堂で、豪華とは言えなかったですけど、なかなか味のある校舎だったと思います。

私はまた、この辺りをぶらぶらしたり、錦華公園の裏にある「忍」というバー、今もありますし、ママも同じ女性ですが、そこで酒を飲んだりしました。「忍」は３０年も前からずっと、３０年前も古いバーだと思ったんですが、古さのまま今もある。同じように中大卒で作家の逢坂剛さんという方がいらっしゃる。私の４年くらい先輩になるんですが、一緒に「忍」に行って、ここは昔俺たちの縄張りだったんだという話をする事もしばしばある。逢坂さんは神保町に事務所を構え、毎日書店巡りをしていますが、私のほうはあまり御茶の水のほうに足を運ぶ事はなくなったんで、今日は車の中から、風景を見ていたのですが、随分変わったんだなあと思いました。古本屋さんのある通りは余り変わっていないですけど、日大の工学部のあるこの目の前の通りと、明大通りに挟まれた通りというのは、かつてお巡りさんに追いかけられて逃げたりしたとか、いろんな思い出のある道です。

私は今『水滸伝』を書いています。皆さんは普段お目にかかる事はない出版関係の方々です。『水滸伝』は何年もかけて書いていくのですが、ここにいらっしゃる方々は間違いなく私の本を売ってくれるだろうと信じて、今日はやって来ました（場内・笑い）。

エー、中央大学の話をしてもいいんですが、時代がそれぞれ違います。ですから、本の話をしようと思います。

いつもいろいろなところを旅行していて、いろんな目に遭いました。紛争地帯を旅行したり、人がまったくいないところ、パリから北京まで車で走った事もある。２カ月かかりましたけれど。パリ｜北京ラリーの試走隊に加わって、道がないところを走った経験もある。

いろんな旅の経験の中でひとつ皆さんに聞いていただきたい話なんですけど。西アフリカというところを旅行しました。西アフリカはどこにあるかというと、人間の頭蓋骨をアフリカ大陸に例えますと、ちょうど後頭部ですね。皆さんがよくご存じの国と

人間が「人間」であるために

北方　謙三

「SUPA＝西アフリカの人達を支援する会より」

言えば、たぶんセネガル、その首都がダカール。パリ｜ダカ今やっていますよね。パリ｜ダカ・ラリーというのはパリからダカールまで走るラリーです。それより他にシエラレオネとか、ちっちゃな国がある。西アフリカで一番大きな国というのは象牙海岸と訳されるコートジボワールという国です。コートジボワールは経済規模の大きいところと言えます。結構いい食べ物もありますし。アフリカっていうのはちょっと行かないとすぐ内戦が始まって政権が変わったりする。ぼくが行った頃は、もう随分前ですけれど、人が多くて、猥雑で活気のある国でした。そこへ行って、その後すぐに奥地へ行こうというんで、ブルキナファソというほうに行った。

ブルキナファソというのはコートジボワールとマリとニジェール３カ国に挟まれたサハラ砂漠最南端の国です。入国します時に、イミグレーションカードを書きますが、その時、職業欄にノベリストと書いたんです。兵隊がカードにスタンプを押しているんですが、「ノベリスト？　これ何だ？」

って言うわけです。その前、フランスに入国する時、ノベリストと書いたら、「嘘つけ」と言う。

「嘘じゃない」

「で、今まで何冊書いた？」と言われたので、

「６０冊ほど書いた」

　と応えたら、ある種、尊敬のまなざしで見られました。

外国の作家、特に英語圏とかヨーロッパの作家と日本の作家を比べますとね、日本の作家はというのは、いわゆる読書人口が違いますから、仕事をしなければならない。アメリカの作家などは１年に１冊、英語で本を書けば悠々自適の生活ができるというんですが、我々は１年に１０冊書かねば、クルーザーも持てないし、好きな遊びもできない。

　ブルキナファソというのは貧しい国だよと言われた。入国の時、ノベリストという職業はないと言われた。それまでヨーロッパのいろんな国に入る時、「そうか、本書いているんか」とある尊敬のまなざしで見られた。当然ながら、尊敬のまなざしで見られるとおもったのに、兵隊が、

「ノベリスト？　これ何だ？」って言う。

「ノベリストはノベリストだ」と言うと、

「もしかしたら、お前、リベラリストか」と言う。

リベラリストは捕まっちゃうんですよ。ああいう国で捕まるととんでもない目に遭うんです。全部裸に剥かれて、口の中から肛門の中まで全部調べられるという。いくら何でも西アフリカくんだりまで来て、肛門の中まで調べられたくないなあと思って、必死になって、「ノベリストというのは本を書くんだよ」

　とか言っても、フランス語圏なのでフランス語しか通じません。僕は英語で言うわけですけど英語はまるで通じない。もう、仕草でペンを持つ事をやってたら、

「なんだお前、絵を書くのか」

　と言われた。この際、絵であろうが小説であろうが何でもいいとおもって、

「そうだ」と言ったら、

「それはなあ、アーチストって言うんだよ」と教えてくれました（場内・笑い）。

　首都のワガドゥグに入ったら、道はほとんど舗装していない。メーンストリートは舗装してあるんですが、路肩はほとんど崩れている。車は時々走っている。

この国には本屋さんなんかないだろうな。小説なんか読まないだろうな、と思いました。それはとりあえず首都なんですけれど。いちおうホテルもあるんですよ。地面に寝なくてもいいホテルがある。

なんとか古い車を手に入れて、奥地のほうに旅行に行くことにした。いちおう首都ですから、水はある。そこで、食料と水をいっぱい積んで行ったんですよ。奥地へ行くと食料がないと言われたので。奥地に行くにしたがって、だんだん貧しくなって。おじいさんが昼寝をしているとおもったら、死んでいるんです。

　もっと奥地へ行くと、子供が出てくる。栄養失調でおなかが膨れている子供です。フランス語で喋れる言葉と言

きたかた　けんぞう

作家　1947年唐津市生まれ。中央大学法学部卒。81年『弔鐘はるかなり』でデビュー。83年『眠りなき夜』で吉川英治文学新人賞、85年『渇きの街』で日本推理作家協会賞、91年『破軍の星』で柴田錬三郎賞をそれぞれ受賞。

えば、「ムッシュウ」（旦那）の一言だけです。

「ムッシュウ」（旦那）「ムッシュウ」（旦那）と言いながら、痩せたちっちゃな手を出すんです。何かをくれというわけですけれど、お金をあげたとしても、買うものなんか何もない。食料が欲しいと言われても、限られた分量しか持っていないわけです。あげることは吝（やぶさ）かではないんですが、でもあげることは正しいのか、正しくないのか。あげたとしても、一時的に飢えを満たしてあげるだけで、かえって残酷であろう。これはあげない方がいい。

また、飢えた子供を目の前にして自分だけが食べるわけにはいかない。４日くらいでしたが、水だけで暮らしました。

その時、私が思い出したのはサルトルです。フランスのサルトルがノーベル文学賞を受賞した時に、コメントを出した。

「飢えた子供の前では文学は無力である」

これは本当だと思いましたね。この国にノベリストがいなくて当たり前だ、と。

小説なんてない。小説が飢えた子供になんの役に立つんだ。俺は何をやってんだ。日本にいて、コショコショと小説を書いて。いったい俺なんなんだ。小説家っていったいなんなんだと思いました。やっぱり根源的な疑問でしたね。自分が小説家であっていいんだろうかということが西アフリカにおける根源的な疑問として出てきたのです。

ずっと悩んでいました。

こんな国の中で小説家という人間が旅行なんかしていいんだろうか。そもそも、小説家がいていいんだろうか。作家という仕事が何なのか。本というものが何なのか。ズーと考えました。落ち込みました。本をいくらあげたって、飢えた子供のおなかはいっぱいにならない。がっくり落ち込んで、首都のワガドゥグに帰ってきました。９キロ痩せていました。

がっくり落ち込んでどうしようもない状態だったんですけど、次の国に行こうということになり、トーゴっていう国に行きました。トーゴへ行っても落ち込んでいるわけです。作家、やっぱりやめた方がいいんじゃないか。畑を耕して作物を作るとか、海で魚を獲ったりする仕事の方が、本当に人間的なんじゃないかとか思いました。

トーゴの首都ロメは、僕が行った時は経済状態は非常によかったです。

ロメではオテル・デュ・ドゥ・フェブリエ（「２月２日ホテル」という意味です）に泊まりました。まず部屋にちゃんと鍵がかかる。バスルームがあるんです。水が出る、トイレがある。それまでは野糞ですよ。お湯が出て身体が洗える。文明だなあと思った。

文明だなあとは思いましたが、自分は落ち込んでいる。小説家であっていいんだろうか。珍しい所だから旅行しようなどという形で旅行していいんだろうか。自分が落ち込んでいることの根源をずっと考え続けて来ました。

何日か、ロメのオテル・デュ・ドゥ・フェブリエにいました。町の中を見て回ったりして、戻ってくると座って、外を眺めていました。ホテルのフロントに真っ黒けだけれども、あの辺りは世界最黒と言ってよい、夜遭ったら白い眼と白い歯しか見えない。真っ黒けだけれど、可愛い女の子がいました。その真っ黒けだけれど可愛いお姉ちゃんと結構仲良くなった。多少英語が喋れる子でしたので。

人間が「人間」であるために

平成13年出版白門会新年会・特別講演

北方　謙三

僕は毎日、外をまわってきて帰ってくると、ホテルの前にズラーッと並んでいるベンチに腰を下ろして、煙草を吸いながら通りを眺めていました。その時考えることは、小説家っていったい何なんだ、ということでした。

ブルキナファソと比べたら、トーゴは経済状態のいい国ですが、街の中を駆けずりまわりましたが、本屋さんはなかった。雑誌を地面に１０冊くらい置いて売っていました。どこからか持ってきた雑誌、あるいは旅行者が置いていった雑誌を売っているんですよ。フロントの女の子がホテルから出てきました。アフリカでももてるんだなあと思ったですけど、僕の座っているベンチではなく隣に座った。“恥ずかしがり屋なんだなあ。しばらくして、僕のそばのベンチにきて、日本の国の話をしてくれとかなんとか、そういうところからいろんなことが始まるんだ”とか想像していたわけです。

すると、ホテルの向かい側から、これまた真っ黒な女の子が、花柄のワンピースを着ていましたが、現れました。ワッーと走ってきて抱擁しているんですね。なんだ友達を待っていたのか、とがっかりしました。

しばらくすると、二人が何か語り合っているんですね。語り合っているんですが、何だか様子が変なんですよ。あまり見るのも失礼なので、手をかざして耳だけ傾けていると、一人の声しかしない。それに何か口調が変なんです。ホテルの女の子が読み聞かせているんです。もう一人の女の子は字が読めないんですね。膝においていた本を朗読してあげていたんですよ。１日に何頁か朗読してあげていたんでしょうけど、もう一人の女の子は真っ黒な手に真っ白なハンカチを握り締めて、空を仰いでポロポロ泣いているんです。もうハンカチで顔をふくことさえ忘れて、ポロポロ、ポロポロ泣いているんですよ。それを見た瞬間に、アッ、これ物語なんだ。物語は人の心をこんな風に動かすんだ。食べ物のように人間が生命を維持するために必要なものでもないけれども、物語は人の心を、魂を、こんな風に揺さぶるじゃないか。自分は小説を書いている、これは間違っていないかもしれない。本当に人間が「人間」であるために、本当に必要なものは食べ物だけじゃないだろう。人間が「人間」であるために必要なものというものはやっぱりあるだろう。人間の心を揺り動かすものがあるだろう。その時、そういうふうに初めて、そう思って、自分が小説を書いてるっていうことは悪いことではない、と思いました。

出版白門会の新年会で私が話そうと思った話は以上のような話なんです。

皆さんは本というものを扱っておられる。これは野菜だとか肉だとか米だとか魚だとか、そういうもののように血肉になるものではないですよ。実際に人間が生命を維持するために必要なものではないです。だけども、皆さんはただ紙を売っているわけではないんですよ。これは人間が「人間」であるために、本当に無上に大切なもの、魂を揺さぶる物語であったり、知識であったり、そういう人間が命を維持するためには必要ではないけれど、人間であるために必要なもの、そういうものを皆さんは扱っておられると思います。

僕も出版という大きな言葉の中でいうと、出版業界の中にいる一人なんでしょう。でも、皆さんは直接的に本というものを商品として扱っておられるでしょうけれども、それはただの商品ではないと私は思っています。人間が「人間」であるために本当に必要なものを皆さんは扱っておられると思っています。

同じ出版業界の中の同じ方とおしゃべりをする機会は滅多にありませんで、今日こそは、大宣伝をして皆さんの気持ちの中に私を刻みこんで次ぎは絶対に本を売ってもらおうと企業努力をしようと思ってきたんですが、これでもいろんなところを旅行しまして、いろんなところで心を動かされて、本というものがどういうものか知りました。自分が書いている本というものがどういうものかということを本当に素朴な状態で知ったというようなことを皆さんにお伝えする方が、ふさわしいような気がしました。

私の拙（つたな）い話を聞いていただき、ありがとうございます。（平成13年1月19日）

経過報告
準備から設立まで

副会長
準備会会長
小竹　正倫

出版白門会の会報発刊に当たりご挨拶申し上げます。本日、ここに中央大学学員会出版白門会会報を創刊出来る運びとなり、やっと責任を果せた喜びに、改めて感慨深い想いを致しております。準備会は今から遡ること３年前に当時三省堂書店神田本店長でありました川野邊さんの呼び掛けにて発足致しました。この呼び掛けに発起人として青木書店の佐藤、ブッキングの竹林、柏書房の戸邉、日本経済新聞の藤原、東大出版会の小山、中大出版会の栗山、松井、小学館の井上、檜書店の白石の各氏、不肖日本地図共販の小竹が集まり、中央大学の建学の精神である「質実剛健」を出版業界に大いに吹き込みたい。出版社、取次、書店および関連業界に携わる中大卒業生の地位の向上と中央大学のさらなる発展を願って出版白門会を作って輪を広げたいと念じたものです。そして発起人の皆様より、準備会会長として推挙され、皆様の情熱に自らの無能を省みずお引受けした次第です。

お陰様で念願の本会を昨年10月21日に立ち上げることが出来ました。トーハンの上瀧会長に創立総会にて会長をお引き受けいただき、副会長には日販の小関相談役、講談社の浜田専務、トーハンの金田社長、集英社の朝妻常務、図書館流通センターの尾下社長、學燈社の肥田社長、学事出版の安部社長、日本地図共販の社長小竹が就任し、無事船出したのであります。出版業界は21世紀を迎えて、今種々の問題に突き当たっております。４年続きのマイナス成長、再販制度の存廃問題、ＩＴ革命に伴う流通問題、どれ一つとりましても簡単に解決する問題ではありません。私達はこの価値観の多様化する時代を中央大学出版白門会の下に結集し、忌憚なく議論し、提言出来れば大変意義深いものになりましょう。上瀧会長を中心に出版白門会が大いに発展いたしますよう、会員皆様の御支援をお願い申し上げます。

（おたけ　まさみち・日本地図共販）

会員名簿

（2001年3月1日現在）

氏名	（社名）
青田　恵一	（ブックストア談）
秋森　雄治	（オライリー・ジャパン）
朝妻　伸雄	（集英社）
浅見　勇	（小学館）
安部　英行	（学事出版）
阿部　信行	（トーハン）
阿部　泰裕	（日本出版販売）
雨谷　正巳	（協和出版販売）
新井　隆之	（東京書籍）
新井　知弘	（東京ニュース通信社）
飯島　智恵	（徳間書店）
飯塚　直	（高文研）
井狩　春男	（鈴木書店）
石尾　勝	（ベネッセコーポレーション）
石川　嘉博	（日本出版販売）
石川　栄一	（中央公論新社）
磯貝　保博	（講談社）
市川　治夫	（ダイヤモンド社）
伊藤　潤	（小学館）
伊藤　英雄	（経宮実務出版）
井上　靖士	（小学館）
井上　顕一	（日本出版販売）
今西　啓	（日本出版販売）
岩田　京子	（日本出版販売）
上野　晃	（集英社）
上原　敏弘	（山と渓谷社）
宇都宮昭治	（徳間書店）
宇野　公容	（東京書籍）
海野　郁美	（プレジデント社）
江間　正男	（講談社）
遠藤　康	（丸善）
逢坂　剛	（作家）
大嶋　博	（丸善）
大島　道夫	（新潮社）
太田　和徳	（作品社）
太田　力	（日本出版販売）
大竹　教史	（日本経済新聞社）
大竹　力三	（集英社）
岡野　正貴	（日本出版販売）
岡部　裕章	（三省堂書店）
荻島　靖司	（丸善）
尾崎　健三	（光文社）
押鐘　太陽	（三笠書房）
尾下　千秋	（図書館流通センター）
小関　道賢	（日本出版販売）
小竹　正倫	（日本地図共販）
折橋　正虎	（中央大学出版部）
尾張　秀行	（三省堂書店）
風間賢一郎	（トーハン）
加治屋文祥	（小学館）
加藤　清孝	（日本出版販売）
金田万寿人	（トーハン）
金子　尚道	（学習研究社）
金湖　隆二	（トーハン）
金田　徴	（日本出版販売）
金田　憲二	（有斐閣）
河崎　秀明	（グラフ社）
川崎　良一	（集英社ビジネス）
川野邊　明	（三省堂書店）
菅野　憲幸	（日本出版販売）
菊地　俊夫	（金子書房）
北方　謙三	（作家）
北原　暁彦	（法学書院）
北原　勝治	（泉書房）
木下　潤	（中央大学生活協同組合）
木村　泰造	（東販リーシング）
木村　昭延	（講談社）
窪岡　善則	（サンクロス）
栗山　博樹	（中央大学出版部）
桑原　迪也	（刀水書房）
糀谷　隆一	（中央大学生活協同組合）
郷田　勝也	（中央大学生活協同組合）
上瀧　博正	（トーハン）
古木謙太郎	（ダイヤモンド社）
小口　卓也	（樹芸書房）
國分由喜夫	（エヌ・ジョイ出版販売）
越沢　務	（太洋社）
小島　寿彦	（文化学園・文化出版局）
小菅　昭治	（文藝春秋）
兒玉　憲弘	（共同印刷）
後藤　安史	（有斐閣）
小林　建	（日本出版販売）
小林辰三郎	（トーハン）
小山　美和	（東京大学出版会）
近藤　隆一	（トーハン）
斎藤　和保	（日本出版販売）
斉藤　弘子	（編集者）
坂野　睦雄	（中央公論新社）
佐々木　明	（日本出版販売）
佐々木進三	（岩波書店）
佐藤　憲	（徳間書店）
佐藤　貞男	（青木書店）
佐藤　豊	（吉川弘文館）
佐藤与志哉	（学習研究社）
佐渡嶋勝子	（共同印刷）
佐野　和広	（太洋社）
澤畑　吉和	（春秋社）
篠崎　二郎	（ジャパン・ブック・プロモーション）
澁谷　和人	（就実短期大学）
島崎　修	（島崎製本）
志茂田景樹	（作家）
正林富二夫	（光文社）
白石　紀一	（檜書店）
菅野　紀彦	（主婦と生活社）
鈴木　崇之	（インターネット）
鈴木　裕子	（アイナレイ）
鈴木　武則	（トーハン）
鈴木　晴夫	（フレーベル館）
鈴木　寿夫	（集英社）
鈴木　雅夫	（ＮＥＣクリエイティブ）
芹澤　正博	（図書館流通センター）
千石　雅仁	（東京書籍）
宗　誠	（ダイヤモンド社）
相馬　直記	（集英社）
曽根田正美	（楓書房）
高石　哲夫	（小学館プロダクション）
高須　基仁	（モッツ出版）
高田　俊哉	（トーハン）
高橋　佳奈	（ベネッセコーポレーション）
竹下　尚志	（講談社）
武田　宏一	（日本出版販売）
竹中　宏	（新潮社）
竹林　聡	（日本出版販売）
田島　幸司	（講談社）
田中　敏明	（トーハン）
田邊　創	（ブッキング）
田原　芳伸	（太洋社）
丹田　公和	（毎日新聞社）
千葉　知充	（モーターマガジン社）
塚本　俊雄	（主婦の友社）
土屋　俊広	（講談社）
坪山　佳史	（ベネッセコーポレーション）
寺島　昭彦	（講談社）
道面　響流	（共同印刷）
時津　和男	（小学館）
利根川伸行	（精美堂）
戸邊　博	（柏書房）
外山　保彦	（理論社）
永井　光延	（日本教文社）
中井裕次郎	（中央大学生活協同組合）
長岡　英昭	（ナガオカ企画）
永澤　克彦	（太洋社）
中田　伸芳	（太洋社）
長沼　順一	（日本出版販売）
七澤　博史	（河出書房新社）
中野　正文	（実業之日本社）
中藤龍一郎	（図書館流通センター）
中村　晃一	（学習研究社）
中山　博邦	（小学館）
柳楽　宙	（旺文社）
名島　敏英	（平凡社）
楢原　泰信	（講談社）
西村　隆宏	（日本実業出版社）
西山　俊一	（窓社）
野沢慎一郎	（河出書房新社）
野尻　悟	（丸善）
橋本　美和	（アスキー）
浜　芳幸	（日本出版販売）
浜田　博信	（講談社）
林　和男	（ぴあ）
原　敬一	（日本出版販売）
原田　邦穂	（婦人生活社）
樋口　欽也	（法研）
樋口　康英	（講談社）
肥田　尚昭	（學燈社）
檜山千鶴子	（日経事業出版社）
平井　靖	（日本出版販売）
福原　将人	（日本出版販売）
藤井　武彦	（トーハン）
藤田　秀典	（どうぶつ出版）
藤原　隆通	（日本経済新聞社）
星澤　哲也	（東京法令出版）
堀内　寧章	（三省堂）
松島　周作	（トーハン）
松村　勝夫	（集英社）
松本　貞夫	（小学館）
丸山　尊義	（学習研究社）
三浦　豪紀	（日経ＢＰ社）
三崎　正弘	（日本出版販売）
三島由紀夫	（栗田出版販売）
宮崎　一幸	（東洋経済新報社）
村松　恒雄	（講談社）
毛受　達夫	（丸善）
望月　弘幸	（有斐閣）
森　武文	（講談社）
森住　松雄	（日本出版販売）
森山　光	（日本出版販売）
八鍬　賢治	（学習研究社）
矢澤　秀之	（丸善）
安田　廸雄	（講談社）
八尾　正人	（小池書院）
矢内　廣	（ぴあ）
矢野　寛治	（創美社）
山口　稔	（青春出版社）
山越　博明	（日本出版販売）
山崎　宏	（民衆社）
山本　達夫	（旬報社）
義　広司	（太洋社）
吉川　勝	（日本出版販売）
吉田　正義	（栗田出版販売）
吉田　光雄	（さ・え・ら書房）
吉田　健司	（東京大学出版会）
渡辺弘一郎	（雲母書房）
渡辺　正人	（みずうみ書房）

役員就任に当たって

副会長　小関（おぜき）　道賢（みちたか）

中大で学び、出版業界に身を置く仲間が、顔を合わせお互いの心を話し合う場の誕生を永年にわたって待ち望んで来た夢が実現した。

副会長　浜田（はまだ）　博信（ひろのぶ）

白門を出で、音羽にて禄を食むこと三十有余年。後に続きし諸人に、わが出版人生で得し何を、言ひ置くべきや――自らに問ふ日々なり。

理事　朝妻（あさづま）　伸雄（のぶお）

同じ出版界に籍を置く身として会社内の上司部下の関係を離れ、また取引関係のお付き合いも離れて同窓であるという間柄の中からきっと役に立つものが吸収できる、そんな会になればと願っています。

理事　尾下（おした）　千秋（ちあき）

出版白門会はＤＮＡ探索のようなもので、元を辿れば源流を同じくする川である。姿は違っても胸襟を開いて一杯飲める仲間なのだ。

理事　金田（かなだ）　万寿人（ますと）

先月、ある会合で作家の北方謙三氏と話す機会がありました。その時、氏より「金田さんは白門の先輩ですよネ」と言われ驚きました。出版白門会は既に認知されつつあると思った。

理事　安部（あべ）　英行（ひでゆき）

出版界の質実剛健が集う。決して派手ではないが着実に実務を遂行する。こんな人達が輪を広げ、気心の知れたもの同士で知恵を出し合う。やがて、業界の明日が見えてくるかも知れません。

私も一言　「出版白門会」設立によせて

新井　知宏
（東京ニュース通信社）

私と「出版白門会」との出合いは、去年のマスコミ懇談会の時であった。正直言うと、それまで「出版白門会」の存在すら知らなかった。ダイヤモンド社の市川さんに声を掛けていただいて、顔を出させていただき、初めてその存在を知った。同じダイヤモンド社の宗君と一緒にいたから、私も声をかけていただけたわけで、宗君が友達でなかったら、今でもその存在を知らなかっただろう。まさに運命の出会いであった。

橋本　美和
（アスキー ）

ひょんなことから、お仲間に入る羽目になった。中大ＯＢマスコミ懇親会で、熱く熱く語る「出版白門会」幹部の方につかまってしまったのが最初だった。こういうと後ろ向きかもしれないが、私にとっては、飛んでもない出会いがそこから始まった。まだ、どんな人たちの集団なのかわからない。だけど、幹部のみなさんはとてつもなくパワフルで、きっと何かを起こしてくれそうである。これからどうなるのか、その一翼を担っていきたい。

宗　　誠
（ダイヤモンド社）

働き始めるとすぐ「同じ業界で働く大学ＯＢのみなさんと交流を持ちたい。そういう場があれば……」と思うようになった。そんな時、「出版白門会」の話を聞いた。白門会では、さまざまな企画を通じてＯＢの方々とお話しができただけではなく、今年の新年会では作家の北方謙三先生の講演まで拝聴することができた。名刺交換の際、先生がおっしゃった「新人ですか。頑張ってください」の言葉を胸に今日も仕事に励むのである。

皆様からの原稿・情報を募集しています!

広報委員会では皆さんの情報をお待ちしています。どんどんお寄せください。
お待ちしております。

新規会員募集＆会費納入のお願い

◎「出版界に新風を送り込もう！」を合い言葉に発足した「出版白門会」を発展充実させるためには新会員の入会が必須です。積極的なご案内をお願いします。

◎４月より新会計年度に移るため平成13年度の会費をお願いします。年会費5000円（新規入会の方は別に入会金1000円）を同封の振込用紙にてお振込願います。
郵便振替口座番号　**00190-5-665957**　口座名称　**出版白門会**

〈連絡先〉　TEL:0426-74-2354　FAX:0426-74-2351
中央大学出版部　栗山　博樹

役員紹介

会　　長　上瀧　博正（トーハン）
副 会 長　小関　道賢（日本出版販売）
　　浜田　博信（講談社）
　　小竹　正倫（日本地図共販）
理　　事　朝妻　伸雄（集英社）
　　尾下　千秋（図書館流通センター）
　　肥田　尚昭（學燈社）
　　安部　英行（学事出版）
　　金田万寿人（トーハン）
幹 事 長　川野邊　明（三省堂書店）
副幹事長　白石　紀一（檜書店）
書　　記　竹林　　聡（ブッキング）
　　戸邉　　博（柏書房）
会　　計　藤原　隆通（日本経済新聞社）
　　小山　美和（東京大学出版会）
会計監査　岡部　裕章（三省堂書店）
組織委員会委員長
　　栗山　博樹（中央大学出版部）
事業委員会委員長
　　佐藤　貞男（青木書店）
広報委員会委員長
　　井上　靖士（小学館）
運営委員　市川　治夫（ダイヤモンド社）
運営委員　海野　郁美（プレジデント社）
　　窪岡　善則（サンクロス）
　　高田　俊哉（トーハン）
　　道面　響流（共同印刷）
　　中村　晃一（学習研究社）
　　橋本　美和（アスキー）
　　檜山千鶴子（日経事業出版社）
　　森　　武文（講談社）

編　集　後　記

公取の決定に揺さぶられる再販制。経営の判断を錯誤し易い委託制。何れも金属疲労を起こしている。一方、企業も社員も流動化の傾向がみられる。21世紀は既成フレームの破壊から始まる予感の中、同窓で同業界という共同意識の出版白門会は船出した。会報創刊号の出来は改善の余地を多々残しており、会員の叱咤激励を待つ。継続が力となるためには、皆様の支援にかかっている。積極的な協力を切に希望する。